１．た・づ・な

「日本馬は強くなった！！」

社団法人　日本装蹄師会
会長
今原　照之

年も改まり2012年。考えてみれば小生、馬に関係して半世紀になる。昭和38年（1963年）、JRAに獣医師として奉職以来、競走馬を見続けてきた。過去を振り返るのはあまり好きではないが、若い時に見た競走馬（昔の馬）と今の馬をつい見比べてしまう。今の馬の馬体は昔に比べ随分大きく逞しくなった。学術的な数値の裏付けを持ち合わせているわけではないが、今の2歳馬は昔の3歳馬（満年齢）に匹敵する馬体を有している。

昭和38年当時、JRAの東・西トレセンはなく、競走馬は東京・中山・京都・阪神そして中京の各競馬場で繋養されていた。1歳馬の入厩開始は10月1日で、この日を目指して牧場から馬が次々と入厩してきた。しかし、これらの馬は牧場で初期馴致もされていなかったので、調教師は翌日から、ひき馬、ハミつけ、鞍置き、ロンギ、騎乗等の馴致に取り組んでいた。中にはうるさくて体を触ることもできない馬もいて、検査の採血ができず私も苦労させられた。今では考えられない厩舎での馴致調教は、翌年6月の2歳新馬戦を目指して馬を仕上げねばならないため、調教師とスタッフの力量が問われた。

昭和49年（1974年）、ニューマーケットの調教場を訪れた時の驚きは今も忘れられない。時計台のある下方から坂道を駆け上がってくる調教馬の馬体は逞しく、日本馬と比べ前躯の筋肉の発達がすごかった。例えが適当でないかもしれないが、平地調教の日本馬は後輪駆動車、坂路調教の英国馬は四輪駆動車とのイメージが焼付いた。彼我の調教の実態を見せられ、坂路調教は育成期にも必要と考えていたが、平成12年（2000年）に運用を開始した軽種馬育成調教センター（BTC）の坂路馬場に結実した。

昭和50年代後半になると、国内景気の低迷等の影響で馬の移動サイクル（牧場→競馬→牧場）に変化がみられるようになった。競馬では古馬偏重の競走体系に傾き、1歳馬のトレセンへの入厩が遅れ、年を越え2歳に及ぶようになってきた。この年齢になれば調教は必須のため、生産地で育成調教を行わざるを得なくなった。

一方、昭和56年、第一回ジャパンカップが行われ、日本馬は外国馬に大敗した。当然のことながら、如何にして外国馬に勝利するか、日本にとって何が欠けているか等がJRAや関係者により検討され、育成調教の充実の必要性が謳われた。JRAは全国18か所のモデル育成調教施設の助成事業を展開し、育成調教の重要性を示した。この頃から、馬に関わる人々の「強い馬づくり」が実質的にスタートした。

近年、ジャパンカップにおいても、海外ではドバイワールドカップや凱旋門賞でも日本馬が活躍できるようになったのは、昔に比べ馬体が大きく逞しくなったこと、サンデーサイレンスはじめ優れた種牡馬との配合による生産そして育成調教が充実したお蔭だ。その中でも、「鉄は熱いうちに打て」のとおり、育成調教の充実が日本馬を世界レベルに引き上げたと信じている。

競馬の順調な施行には、その背景となる社会の安定と経済の発展が不可欠である。しかし、米国の景気低迷、欧州では財政危機が金融危機に拡大し世界経済を揺るがしている。その影響で中国やイン

ドでも景気が減速し始めた。日本は東日本大震災、原発事故と放射能汚染にみまわれ、超円高と株安に苦しみ、企業の生産拠点の海外移転による産業空洞化が加速している。

このように競馬の背景は世界的に見てよくないが、別の見方をすれば、各国が同じ背景の下で国際競走を渡り合える時代ともいえる。競馬パート1国の日本として世界最高峰の競走の勝利を目指さねばならない。ドバイワールドカップはヴィクトワールピサが勝利したので、当面の目標として凱旋門賞の勝利を期待している。凱旋門賞を勝利すれば世界の眼は日本に向き、日本馬の輸出にも弾みがつくだろう。

いつの時代にあっても、「強い馬づくり」は永遠の課題である。近年、育成調教について諸外国から学ぶことも少なくなってきた。むしろ今後は、叡智を注いで醸成してきた日本の育成調教のノウハウが海外から求められる日も近いように思っている。